

第四章

一

雪がひとひら、にび色の空から落ちて地に辿り着く前に溶けた。

次第に数を増し、ゆっくり、やがて次々と、終りなく落ちてくる。瞬く間に茶色の土や枯草が白く覆われていく。

周囲を深い森に閉ざされ、背後には低く幾つもの山が連なる。そしてその更に奥には、再び鬱蒼とした森が広がっていた。

北の辺境を覆う黒森、ヴイジャ。それを抜けた先は最早、王の版図ではない。

外界から隔絶された土地に、寄り添うように建てられた粗末な家々。その上にも、白い幕が容赦なく降り募っていく。

「これが始まったら、ここは暫くの間は雪の中だ」

ロットバルトを振り返り、レオアリスは懐かしむように空を見上げた。この北方の辺境では、冬は一年の内の半分近くにも渡り、世界を閉ざす。

「よく、ずっと雪が降ってくるのを見てたな。——何か案外飽きないだろう」
様々な軌跡を描きながら落ちてくる雪は、見ていてつい引き込まれる。

この村で、雪が音もなく降ってくるのを眺めながら、色んな事を取り止めるも無く考えた。

それは一族の事だっただろうか、自分の未来の事だっただろうか。

一番は、この厳しい地で、決して豊かではなく、それでもこの土地に寄り添うように暮らしている、彼等の事だ。

白く染まり始めた細い道を、自分が暮らした家へと向う。

『そなたの育て親に会うといい』

彼等はどんな事を知っているのだろうか。もう大抵の事では驚かないと思いつつも、僅かな不安と、久しぶりに祖父の顔を見れるという懐かしさに、レオアリスは足を早めた。

長老は時期外れの帰郷に、驚いた顔を上げた。

「珍しい事じゃ。年に一度しか帰らぬ奴が」

そう言いながらも、手にしていた書物を脇に積み上げた本の山の上に置くと、嬉しそうに立ち上がり、囲炉裏の一角を開けてレオアリス達を手招いた。

「お久しぶりです」

ロットバルトが会釈をすると、長老は表情の読み取りにくい鳥に似た顔の上に、確かに笑みを載せる。

「まだ、これの傍にいてくださるか。有難い事だ」

「どういう意味だよ」

囲炉裏の前にあぐらをかいて座り込み、レオアリスは祖父を睨んだ。

「周囲に支えてもらわねば、お前のような若造が、まともに上になど立てまいて」

「——知ってる」

長老は自分もレオアリスの前に腰を降ろしながら、少し意外そうに顔を傾けた。囲炉裏に掛けられた鍋から湯を器に酌み、二人の前に置く。仄かな香草の香りが狭い室内に漂った。

「ほお。成長したものだ」

からかうような響きにレオアリスは不満そうに顎を逸らせた。

けれど、レオアリスが望むままに動けるように、グランズレイを始め、一隊のそれぞれが様々な配慮をしている事は、良く判っている。普段口に出す事こそないが、自分一人で生きているのではない事は、常に実感していた。レオアリスが今の位置にいるのは、彼らが在ってこそその事だ。

自分の一族は王に対して反乱を起こしたという。

本来ならば師団にいるどころか、生を持っていない事すら不思議な立場だ。それでも今ここにいるのなら、それはその時その時に、誰かが手を差し

伸べてくれて来た結果なのだろう。

既にレオアリスの中に迷う心はない。自分が望むのは、師団にあつて王に仕える事だ。何故その事に、ここまで強い思いを感じるのかは分からない

い。

だがその事は今回の件を経て、今まで以上に強く心の中に根を下ろしている。

木のはぜる音と共に、囲炉裏の中の炭が崩れる。レオアリスは赤く熱を発する炭火に向けていた顔を上げ、長老の落ち窪んだ瞳を捉えた。

「教えて欲しい事があって来た」

「——ほう」

「めんどくさいから単刀直入に言うぜ。俺の一族について教えてくれ。それから、——バインド」

長老はしばし、じっと囲炉裏の上に視線を落としていたが、やがて深い溜息と共に顔を上げた。

「知ったか」

肺から押し出すようなその声には、苦しみと、どこか開放にも似た安堵の響きがある。

「バインドが、王都に現れた」

弾かれるように長老は腰を浮かせた。その拍子に脇に積んであった書物が崩れる。表情の掴みにくいその顔に激しい驚愕と憎悪が交じり、身体を支える為に付かれた手が、囲炉裏の縁の木杵を強く握り締めた。

「——まさか。……死んだと」

「……思われてたみたいだな」

祖父の見せた激しい感情に驚きを覚えながらも、レオアリスは立ち上がり、と祖父の横に行き、崩れた本を拾い上げた。

「相変わらずごちゃごちゃしてんなあ」

所狭しと書物や薬草が積み上げられた壁際にそれらをまとめて置き、改めて祖父の脇に座り直す。再び、じっとその顔を見つめる。

「——生きてて、まだ斬り続けてる」

「……会ったのじゃな。バインドと」

「ああ」

長老はすぐに呼吸を落ち着け、静かにレオアリスを見た。既にその面からは憎しみの色は影を潜め、入れ替わるように深い悲しみが広がっていく。

「——どこから、話すべきか。……やはり、我等とお前の一族との関わりからじゃろうの……」

口を閉ざせば聞こえるのは、囲炉裏の炭のはぜる音と、沸きあがる湯がしゅんしゅんと立てる音だけだ。

降り続ける雪に音を吸い取られるような静寂。

長老は暫らく黙ったまま、立ち昇る湯気を追う様に視線を上に向けていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「——我らは、かつて忌み族と呼ばれた」

彼等——劍士の一族に出会ったのは、それほど昔ではない。レオアリスが生まれる僅か一年前、ほんの十八年ほど前の事だ。

『忌み族』

訪れる地に災いを呼ぶとして疎んじられる種族をそう呼んだ。

疫病、災害、飢餓。偶然か必然か、そう呼ばれる一族は確かに、災いのある場所にその姿を見られる事が多い。根拠のない迷信に近いものではあつたが、石を以て追われる事が常だつた。

カイルが長として一族を率いるようになってから、どれほどの時が流れたのだろう。数十年か、数百年か。常に疎まれながら生きるには、例えばような長い長い月日だ。

一箇所に落ち着く事が叶わず、各地を点々としながら漸く北の山脈の麓に辿り着き、誰も住み着くものがない凍った大地の上に、細々とした村を作り上げた。一年の半分近くが雪で閉ざされるそこでなら、誰からも忌まれる事なく、ひっそりと暮らしていけると思ったのだ。

その山脈の更に奥に広がる深い森、黒森の中に、彼らの——劍士の一族の里があつた。

劍士の存在を知った時、村人の誰もがこの地を離れる事を考えた。自分達が忌み族と知られれば、おそらく劍士達はこの村を、瞬く間に滅ぼしてしまうだろう。

だが——ここを出て再び彷徨う事は、抑えがたい疲労を伴つた。劍士達の存在を恐れながら、それでも安住を求める心を捨てられないまま、不安の内に日々を過ごした。

けれども、日々の中で劍士の一人とも出会う事はなく、次第に恐れる気持ちは薄れ、不安は和らいでいった。

誰も、この地には来ない。

もはや憎しみをぶつけられる必要はないのだと。

一度目の厳しい冬を越し、短い春を終えようとしていた頃の事だ。

薬草を摘みに数名で森の中に入り、そこで一人の若い男に出会つた。

初めカイル達は他者の存在に怯えさえ覚え、極力係わり合うのを避けようと、すぐにその場を離れるつもりだつた。

だがその青年は周囲を見回し、しきりに思い悩む様子が見て取れる。カイルが思わず道に迷つたのかと声をかけると、青年もまた驚いた顔をしたものの、どこかほっとした色を浮かべた。

どうやら家にひどい怪我を負つた者がいるらしく、薬草を探しに来たのだがどれが効くのだからよく分からないのだ、と下生えに眼を落として手を付けかねたように溜息をつく。

確かに森の中は様々な野草が至る所に生え、薬草に疎い者にはどれが何の効能を持つのか、一見して見分けは付かないだろう。カイルは周りを見回し、一番良く効く薬草を見つけると、それを示した。

「お前さんは運がいい。今の時期しか花を咲かせんものじゃが、その花弁なら、深い傷でも七日ほど塗布しておれば塞がるじやろう。ただ磨り潰せばよい」

そう告げると青年はひどく嬉しそうに笑い、礼を述べて教えられた薬草を摘むと森の奥に消えた。

他者と関わる事には僅かな不安を覚えた。反面、もうずいぶん長い間他者と言葉を交した事すらなかつた自分達にも、まだ礼を言ってくれる者があつたのだと、その事が心を暖めた。

数日後、その青年がふらりと村に現れた。彼は驚く村人達の前に、森で獲つたらしき獣を差し出した。

「あんた達のお陰で助かつた。結構マズイ傷だつたんだ。これはその礼だ」自分達は肉を食べないのだという、精悍な面にはつの悪そうな色を浮かべる。

「そりや逆に悪い事をしたな。ま、狩っちゃまつたし、里に持ち帰って食うか。——別の礼をするよ。何がいい？」

「特には。それよりも、あの薬草のみでは傷は塞がっても、体力まではなかなか回復しないじやろう。今、煎じ薬を持ってくるから、戻ったらそれを飲ませてやるよ」といふ

青年は驚いたようにカイルを見ると、再び嬉しそうな顔を見せた。

「礼に来て、また助けられるとはな。——俺は、ジン。この奥の里に住んでる。ま、最初に言っておくが、剣士ってヤツだ」

長老の顔に浮かんだ驚きの表情を眺め、青年は面白そうに笑った。

「やっぱり知らなかったな。安心しろよ。何も取って食う訳じゃない」

それから、今まで周囲に集っていた村人達が怯えるように後退ったのに気が付き、困ったように黒い髪をくしゃりと交ぜる。

「剣士ってそんなに印象悪いか？」

カイルは慌てて首を振った。

「い、いや。すまんの。むしろは——剣士を見たのは初めてじゃて、少し驚いておるのだ」

それはただの辞令というだけでもなく、本当に彼には好ましい印象しか抱いていなかった事もある。それに剣士とはもつと恐ろしい姿なのだろう、と漠然と考えてもいた。

「それならいいけどなあ。でもここに移り住む時、周りの奴等から俺達がいるのは聞いてたんだろ？ それでわざわざ住み付くんだから随分胆の据わった奴らだつて、うちじゃ話題になったんだ」

「……いや、知らなんだ」

「何だ、怖がつてない訳じゃなかったんだな。でも珍しいぜ、こんな辺境に好んで住むなんて。一年の半分近くが冬だ。あんまり寒さに強そうにも見えないけどなあ」

それについては曖昧な返答しか出来なかった。青年は残念そうな様子しか見せず、取り繕ったように聞こえなかったかどうかは分からない。

自分達が忌み族と呼ばれる者である事を知られば、この青年はやはり剣を抜くかもしれない。

今までどれほどそれを経験しただろう。

浴びせられる石つぶて、罵声、嫌悪の眼差し。時には武器を以て追われた。

けれど青年はそれ以上詮索する事もなく、受け取った煎じ薬にもう一度礼を言うのと帰っていった。

それからしばしば、青年は村に姿を見せるようになった。

よほど怪我人を癒せた事に感謝しているらしく、あれ以降は獣こそ持つてこなかったものの、何かしらを手土産に持ってきては、村人達と言葉を交わした。

一人の時もあれば、数人を伴う事もあった。怪我をしていた剣士を伴って現れた事もある。

その男は青年より十は見た目も上で、髭を蓄え、一見して学者風にも見える。

「俺の義兄なんだよ。見た目はこれだけですがすぐかつとなっちまってな、お陰で要らん負傷が多いんだ。この通りすっかり良くなったけど、今回ばかりはさすがに爺様達に会わなきゃ死んでたぜ」

青年の口調は軽やかだったが相当に深刻な傷ではあったのだろう、男はгентトと名乗り、カイル達に歩み寄りその手を取ると、気難しいような顔に子供のような笑みを浮かべ、やはり何度も礼を述べた。

剣士達はカイル達の生活に興味を持ち、術や薬草について様々な質問をし、またカイル達では困難な作業を良く手伝ってくれた。

カイル達の種族は元々力も強くない。自分達で建てたあばら家は、先の冬に雪の被害を受けあちこちが壊れていたが、それを補強してくれたのも彼等だ。木を伐る時は斧など必要とせず、一人剣士が黒森まで行って斬ってくるという。

「やり過ぎるとヴィジャが怒るから、結構気を使うけどな。けど意外とそこが剣の制御の訓練にもなる。だから一番制御飛ばし易いヤツに行かせるんだが、大抵гентトかな。良く失敗して伐りすぎてるが」

「義兄に冷たいと思いませんか」

彼はカイル達に訴えるように溜息を向けたが、黒森の樹を伐ること自体カイル達には恐ろしい事で、何とも返事をしかねた。カイル達は森に入るのでさえ常に細心の注意を怠らない。

しかし黒森に暮らしている事さえ、彼等は楽しんでるようだった。「失敗するとどうなるのじゃ。殺されてしまうのか」

村人達が恐々と身を乗り出すと、青年はあっさりと笑った。

「それは無い。まあヴィジャは優しいから、二、三日出してくれない程度さ。けど奥に行っちゃもうとでかいのがいるからな。ゲントはそれでこないだ一戦交えて、腹を半分喰われかけて帰ってきたんだ」

黒森の奥深くには、強大な魔物が棲むと言われている。その魔物に喰われかけたと聞いて、カイルは驚いた。あの時渡した菓草は、そこまで深い傷に対応できるものではない。第一そんなものと戦うなどと、想像も及ばないものだ。

剣士の回復力の高さ、戦場での強さを垣間見た気がした。

彼等が村を訪れるにつれ、次第に彼らの事も判ってきた。

里人の数はそれほど多くは無い。青年を含め、里に居るのは全部で二十名にも満たない小さな部族のようで、皆外見は若い成人ばかりで、幼い子供は無かった。

青年は中でも一番若かったが、どうやら一族の長であるらしかった。「一応、まとめ役が要るから。」剣士達の誰もが笑ってそう言い、実際彼等の中にも長というほど取り立てた上下関係は感じられない。

ただ青年が常に首に掛けていた青い石のついた銀の飾り、それは長が受け継ぐものなのだと聞いた。

「誰が一番強いのか」やはり興味を覚えてそう尋ねると、皆迷わず青年を挙げる。実際に彼が剣を持つ所を見た事などなかったが、剣士達の誰もが彼を誇りにし、その強さに憧れを抱いていた。

夏も盛りになる頃には、カイル達の不安は薄れていた。

巷で殺戮者として恐れられ、自分達が存在を知られる事を恐れていた剣士達は、付き合ってみれば自分達と何ら変わる事はなかった。

そして不思議と、全く性質の異なるはずの彼等と気が合った。ただ切り裂く存在として恐れられていた剣士。何がそうさせていたのかは分からないが、もはや彼らを恐れる気持ちはどこにもなかった。

ただ、自分達が忌み族と呼ばれる者である事実を、彼らに告げられないでいる事に対する罪悪感、日増しにカイル達の中で大きくなっていった。

隠したくないという思いと、告げる事で彼らの視線が変わる事を恐れる気持ち、その二つが常にカイル達の心の中にあつた。

ある時、青年が一人の女性を連れてきた事がある。冬の前だっただろう。

芯の強さを感じさせる、凜とした美しい女性だった。青年と同じ漆黒の髪が、しなやかに背の半ばまで流れている。

「紹介するよ、俺の妻だ」

彼女は青年の傍らで頭を下げ、穏やかに微笑んだ。

「これはまた、美しい女性じゃの」

当然カイル達と美の基準など違ったが、自然とそう口から出たのは、内面から照り映えるような美しさを感じたからだ。その理由は、すぐに分かった。

「いい女だろ。けど剣も気も滅法強くてさ。口説き落とすのは命懸けだったんだ」

こつそりカイルの耳元で囁き、隣から向けられた視線に慌てて顔を引き締める。それから集まっていた村人達をぐるりと見渡した。

「この冬を越したら、子供が生まれるんだ。そろそろ雪も降り始めるし、そうすると暫らくは連れて来れないから、紹介しておこうと思ってさ」

その場の者達は皆顔を見合せ、それから口々に祝いの言葉を述べる。彼女の内から零れる光は、ますます輝きと柔らかさを増したように思えた。

青年は少し照れくさそうではあるが、その上には待ち遠しくて仕方がない様子が見て取れる。

カイル達もまた、自分達の事のように喜びを覚えた。

青年の義兄、彼の妻の兄は二人の肩に手を置き、やはり嬉しそうに破顔した。

「剣士なんて戦うばかりが頭にあつて、他は二の次でな。我々の一族に漸く生まれる子供だ。待ちに待った子だ。きっと、いい子が生まれるだろう」

その言葉に、レオアリスは形容しがたい表情を浮かべた。右手が、服の中に納めた銀の飾りの辺りを押さえる。

その子供——それがおそらく、レオアリスの事なのだろう。

戸惑いと、思慕、喪失。

そんなものが入り混じったその顔を、長老は悲しげな瞳で見つめた。

その夜、村人達は誰からともなく、それを告げる事を決めた。

もし疎まれるとしても、他から耳に入るよりは、自分達から告げた方がいいと思っただのだ。

告げようと決めたものの、そうするのに数日はかかったのだろうか。

彼らの表情が、どう変わってしまったのか。

こうして他者と交流する事が、どれほど心安らぐ事か、どれほど失いがたいものか——。

それは初めて手に入れた安らぎだ。

今更それを失ったら、この先の放浪は耐え難い苦痛を伴うだろう。

それでも意を決して告げたのは、どうしても、これ以上隠してはいたくなかったからだ。それは彼等の信頼を裏切る事になる。

そして、忌まれたとしても、彼らの手にかかるのであれば、その方がいいと。

だが、恐れていたような反応は全くなかった。

まるで裁断を待つ面持ちで顔を伏せた村人達を前に、剣士達は少し途惑ったように顔を見合わせる。それから先ずは青年が、半ば苦笑しながらも申し訳なさそうに口を開いた。

「緊張してもらって悪いが、最初から知ってるよ」

村人達が耳を疑ってざわめく様を、彼等はどこか面白そうに眺めた。

「そりゃこんなところに来るんだ、ある程度訳有りだろう。第一俺達の方があちこち行くからな。自然と耳には入る」

「それで……」

「それでって言われてもなあ」

青年は腕組みし考え込むように天井を見上げた。

「……我らは、災いを呼ぶと」

「呼べんの？」

逆に興味深々といった態度で問い返され、カイルは返答に詰まった。そんな事は今まで考えた事もなかった。

「い、いや……」

「呼べないんだろ？　じゃああまり意味はない。まあ、迷信なんてのは大体がそんなもんだ」

自分達の恐れと不安が滑稽に思えるほどあっさり、彼等はそれを笑い飛ばした。

剣士というものが皆そうなのは分からない。だが確かに、迷信など気にも留めない程の強さが彼等の中にはあった。

カイル達の喜びがどれほどであったか、言葉に言い表すのは難しい。

肩の力が抜け、安堵に座り込んだ村人達の背を、剣士達の手が軽く叩いた。

ただそれが全てで、これまでの放浪の苦痛を癒し溶かすのには、それで十分だった。

冬に入って、世界が雪に閉ざされ始めても、村と剣士の里とは互いに行き来を続けていた。

そんな中でふと疑問に思った事がある。

出会ってからずっと、彼等は全くと言っていい程、戦場に出る様子がない。通常、戦場にいる事の多い彼等がこんな北の辺境に定住している事もまた疑問ではあったが、尋ねるとあっさりとその答えは返った。

「俺達は主持ちじゃないからな。必要な時に要請を受け、自分達が気に入った戦いなら参加する。気楽なもんだろ」

「主持ち……？」

黙ったまま聞いていたレオアリスが、その言葉に引かれるように顔を上げる。懐かしむように細めていた眼をレオアリスに向け、長老は頷いた。

「そうじゃ。剣士には二通りあると彼は言っておった。自由意志で戦う者と、主を持つ者。わしはどちらが良いのかと問うた」

「よりけりだな。そこに条件がある訳でもないし、必ずしも主って概念でもない。だが剣士にとって、剣を捧げるべき相手を得る事は、何にも勝る存在理由だ。剣士つてのは言ってみれば抜き身の剣だ。主を得る事は、剣を収める鞘を得る事に等しい」

「剣を、捧げるべき相手——」

「お前は既に見つけておるじゃろう」

窪んだ瞳を、じっとレオアリスに据える。その前で、自分の中の想いに答えを見つけたかのように、レオアリスの瞳の光が強さを増す。

長老はそれを暫らく見つめていたが、再びゆっくりと語りだした。

今まで懐かしむように語っていた声に、痛みを堪えるかのような響きが混じる。

「彼等との交流は、今までの放浪の苦痛を全て和らげるようなものじゃった。それは思い返せば短い日々であったが、その間我らは自分達が忌まれるものである事も、ここが死と隣り合わせの厳しい冬を持つ北の凍土である事も、全く気にはならなかった。だが——それでも確かに、我らは忌み族と呼ばれる者だったのだ」

きっかけは、北方辺境軍の村への地稅調査だった。

軍は彼らが何者であるかに気付き、そこにある事を疎んだ。軍に正式に、忌み族を排除せよと命が下されている訳ではない。

忌み族とは根を辿れば、貧しさや日々の苦しさを転化する為により低い位置のものを創り、心を慰める為に創られた蔑称であり、長い時を経て一般の中に流布するようになった、謂わば迷信に過ぎないのだから。

ただ単に、このような北方の辺境にある軍は王都の軍とは違い、地の者達で多く構成されている。迷信もまた、彼等の中では、現実感を伴って生きていた。

出て行けと迫る彼等と、押し問答を繰り返す日々が続いた。

偶然にも、その年はいつにも増して厳しい寒さが続き、近隣の村でも多くの者達が寒さと飢えの為に死んだ。

この厳しい冬は、あの村の者達が呼んだのだと、いつしかそんな噂が流れ出していた。

彼等さえいなければ、自分達の生活はもつと楽なはずだと。

凍りつくような一日を越す毎に、兵達の顔にも憎しみの色が募る。

そして、冬が漸く折り返し点を迎えた頃、耐えかねた警備軍の一小隊が村へと押し入った。

彼等は入り口近くにあった家に火を放った。村人達が凍った大地を耕して作っていた葉草畑にも、燃え盛る松明を投げ入れる。

それから——止めようとして飛び出した一人を、斬り捨てた。

それは今までによく見た光景だった。ひと時なりと身を落ち着けた土地で、終わりはいつもそれとあまり大差ない形で訪れた。

だが、その時そこに、剣士達の一人が居合わせたのだ。彼は村人達の葉草によって命を取りとめたあの男だった。

村に来ていたのは僅か一小隊のみだったが、彼はそれを全て斬り捨てた。それが王の軍でなければ、結果は違っていたのかもしれない。

囲炉裏の前に座り、炭の上に視線を落としたまま動かないレオアリスに、長老は痛みを宿した声でとつとつと語る。

「辺境の一小隊とはいえ、軍に剣を向ける事、それはすべからず、彼等を王に対する反逆者とする事であった。例え王が事実を知り、軍を咎め罰したとしても、それは王の領分。他の者が手を出せば、反逆者となるのは当然じゃった。それは瞬間間に、反乱という名に形を変えた」

暗い夜が高波のように押し寄せる。それはカイル達には成す術もなかった。

「この辺境に向けて、軍が差し向けられた。わしらは自分達の命に代えたとしても、それを止めたいと願った。——だが、既に事態は取り返しの付かないところまで進んでいた。もはやわしらの問題ではなくなり、わしらの陳情など、辺境軍を統括する司令官は一切省みる事は無かった」

「済まない。わしらがこんな所に移り住んだばかりに、こんな事になっ
てしまうた」

だが、詫びるばかりのカイル達に、青年はいつも見せるのと変わらない
笑みを浮かべた。

「気にするな。いいんだよ、俺達は。元々闘う為に存在するんだ。それが
友人の為なら、最高だろう」

「しかし、お前達が反逆者など……！」

青年はカイルの肩を一度叩くと、漆黒の瞳に深い光を刷く。

「……前にも言った事があったよな。剣士にとって、剣を捧げるべき相手
を得る事は、他の何にも勝る存在理由だよ」

「わしらは剣を捧げる相手とか、そんな大したものではなかったが、確か

に友人同士じゃった」

彼等を懐かしみ、誇る、その祖父の顔を、レオアリスは瞬きもせず見つ
めている。

「剣士の一族は強く、差し向けられた軍を悉く打ち破った。雪解けの季節
になっても、北方軍は未だに彼らの一人も討ち取る事が出来ずにいた」

ただそれ故に、事態は膠着化し、問題はすり替わったまま、引き返しよ
うの無いものになって行ったとも言えるだろう。

「——やがて、王は近衛師団を差し向けた。近衛師団第二大隊には、当時
最強の剣士として恐れられていた、バインドがいたのだ」

近衛師団第二大隊が派兵されたと聞いた時、初めて剣士達の間には緊張が
走った。

「第二大隊——という事は、バインドか」

全員がその意向を伺うように、壁際に寄りかかっていた青年を見る。バ
インドの名はカイル達の耳にも届いていた。最強と謳われる剣士。

その男が、この地に来る。

青年は少しだけ面倒そうに口元に笑みを刷いた。

「バインドね、やっかいだな。もう少し早い段階で交渉に持ち込んでおく
べきだったか」

「どうする？」

「どうするも何も、仕方ない。俺がやるよ」

そう告げた顔は、どこか面白がっているようでもあった。

その夜は、いつにも増して空気が冴えていて、上空に昇った臥し待ちの
月が、遠く彼方まで光を投げかけていた。

青い光に浮かび上がった夜の中に青年が立っている。森の奥に視線を注
いでいる青年に近寄ると、彼は振り返りカイルを認めて笑みを浮かべた。

「多分、今日か明日にでも生まれるぜ。なんて名前にしよう。ま、もうあいつが決めちゃってるかも知れないけどな」

ふいに俯いたカイルを見て、不思議そうな表情を浮かべる。

「どうした」

済まないと言った。本当ならどれほど身重の妻の傍にいてやりた事だろう。詫びる言葉を飲み込んで、カイルは青年を見上げた。

「男の子じゃったかの」

「あいつはそう言ってるけどなあ。生まれてみないと判らないさ。けど、これだけは判る」

可笑しそうに笑う。

「絶対、俺より強くなるぜ」

「お前よりもか。まだ生まれてもおらぬのに、親馬鹿というやつじゃの」

「俺達の子だからな。実際、あいつは俺より怖えんだ」

そう言って、青年はまた陽気な笑い声を立てる。こんな時でさえ陽気さを失わない青年を、カイルは救われる気持ちで眺めた。

「教えたい事が、山ほどあるじやろう」

「そうだな……」

そしてふと表情を改める。再び里の方角に引き締まった顔を向けた。

「一番伝えたいのは、剣に呑まれるなつて事か」

それがどういう意味か判らず、カイルは青年の横顔を見つめた。

「剣士はともすれば、自らの剣を抑えきれずにそれに食われる。俺はそういう奴を、何人も見てきた」

青年の上に、どこか翳りの色が浮かんだ。出会ってから初めてのその表情に、カイルはふと不安を覚えて青年を見上げる。

「その可能性があるか？」

「剣士なら誰でも、その可能性は無くはないのさ。だから、俺達は生まれてすぐ、一旦剣を封じられる。剣の力に、身体と心が耐えられるようになるまでな。赤子の内に下手に暴走でもしたら、剣に内から裂かれちゃう」

口調はいつもと変わらないままだが、その声にはどこか思案する響きがある。青年の瞳が里へと引き寄せられるのを見て、カイルは自分の裡の不

安が更に頭をもたげるのを感じた。

「ジン」

不安の正体を測れないまま青年の名を呼ぶと、細められた瞳にいつになく懸念の色を浮かべ、呟いた。

「——剣が、二本だ」

「二本？ それは、珍しい事なのか」

「珍しいな。聞いた事が無い。——生まれる時に、あるいは」

それはカイルに向けられたというよりは、自分自身に確認するように呟かれた。だがすぐに、青年はいつもの笑みを戻した。

「まあ、それも言ってみりや、明日以降の楽しみみてとこだ。取り敢えずは、バインドを倒さないとな」

「出来るのか？」

「さあな。あれと戦うのは初めてだ。剣を合わせてみない事には何とも言えない」

そうは言うものの、青年の上には揺るぎない自信が垣間見える。

「まあ、そんなに心配すんな」

こうして彼が笑っている以上、大丈夫なのだと、何も問題はないのだと、カイルはほんの少しだけわだかまる不安を、心の奥に押しやった。

その翌朝、近衛師団第二大隊が、黒森に到着した。

深い溜息を吐いて、長老は口を閉ざした。長い昔語りの間に、囲炉裏の火は小さくなり、炭は中心を残して灰になっている。

夢から覚めたような、そんな感覚がある。まるで、剣士の一族が、たった今までそこにいたような――。

ふいに火が消えたように、冷えた室内の空気が身体を包む。長老は立ち上がると、扉を開け、屋外のすぐ脇の小屋に積んでいた炭をいくつか取って戻ってきた。新たにくべられた炭は、暫らくの間火を移すのを拒むように、黒い姿のまま囲炉裏の上に横たわっている。

「……それから、どうなったんだ」

レオアリスが囲炉裏の方に顔を伏せたまま、ぼつりと問いかける。

「――王都で、聞いておろう。それ以上の事はない」

「俺の――っ」

顔を上げ、押し詰まるように口を閉ざした。見られる事を拒むように再び顔を伏せる。

長老は疲れた表情の上に、強い悲しみと、それからおそらく、十八年前から全く変わる事のない、誇りにも似た想いを宿した。

「……お前の一族は強かった。特にお前の父は。バインドとも、さほどの違いはなかったであろう。ただ、彼らは戦いのみを求める剣士とは違って、優しさを持っていた。持ち過ぎていたのかもしれん」

重い溜息が、再び熱を増し始めた炭のはぜる音に重なる。

暫らくは、誰も、何も言おうとはしなかった。言うべき言葉を捜しあぐねて、ただ炭が熱を放つ音を聞いている。

やがて、長老は何かを否定するかのように、首を一つ振った。

「わしらは時折、ひどく後悔する。もしも、わしらがそのような存在でなかったなら。もし、わしらにもっと己を守れるだけの力があつたなら。もし……彼等と出会わなかったなら――。おそらく、お前が一族を、父母を失う事も無かつたらう」

「――仮定なんてのは、無意味だろ」

「そうじゃ。それでもな」

「もし、なんて無いんだ。爺さん達に力があるうと無かるうと、そうする事を選んだのは、俺の一族なんだろう」

レオアリスははっきりと、長老に顔を向けた。そこに先ほど見せた、引き絞られるような感情の乱れはない。

「それなら、爺さん達が後悔する必要なんて無い」

長老が再び何か言おうとする前に、レオアリスは立ち上がった。

「少し、外にいる」

長老もロットバルトも黙ったまま、雪の戸外に出て行くレオアリスの後姿を見送った。

彼が死んだと聞かされた時、カイルには信じられなかった。

それは村の他の者達も同様だ。

この北の地で戦いが始まって以来、彼は少しも揺るぐ事なく、まるでどこか散歩にでも出かけるように戦場に向いては、何も普段と変わらないまま戻ってきた。

千余名からなる北方辺境軍は次第に後退し、やがては周辺を取り巻くのみになった時、どこか残念そうな様子すら見せたものだ。

バインドの件が片付いたら交渉の場に持ち込むかと、そう言っていたのは今朝の事だ。

その、彼が、死んだ、と――。

一人の剣士が自分でも信じ難いだろうその事実を呆然と告げた時、カイルにはその事が理解できなかったのだ。

実際には戦場を見た訳ではない。

傷を癒す為の薬草の小瓶が手から滑り落ち、足元で砕けても、それにすら気付かなかつた。

もうすぐ、もう、今日か明日にでも、子供が生まれると――そう言っていたではないか。

戻らない訳がない。

あれほど嬉しそうに、自分に初めて子供が生まれるのだと言った。傍らに寄り添う妻に、かけがえのない者達に向ける瞳。

戻らない訳がないのだ。

剣士が身体を休める間もなく里へ向かった事にも、それが何を意味するのかも気付かずにはいた。

いつ、村を出たのだろう。気付けばカイルは、彼が戦った戦場にいた。切り裂かれた死体が点々と転がった、悪夢のような光景——その中央に震える手が、生気の失せた身体を抱え起こす。

あの快活さも、すでにそこにはない。

何も、感じなかった。

涙すら出ないのが不思議だった。

視界の隅に、一瞬光を放つ何かを捉え顔を向ける。

散乱した兵達の亡骸の間に隠れるように。

あの青い石の飾りが落ちていた。

剣士達の里が減びたと知ったのは、まだ深い夜の中だっただろう。カイルはその言葉を、夢の中の出来事のように聞いた。

告げに来たのは、背が高く威厳に満ちた壮年の男だった。その男が現れた時、村を取り巻いていた兵達が一斉にひれ伏し、男を呼ぶ名前から、それがこの王国の王、その人であると知っても、その驚きも畏れも、どこか心の表層で滑り落ちた。

もはやどんな感情も、自分の裡には無いのだと、他人事のようにそう考えていた。

ただ、青年が死んだ事に触れた一瞬だけ、王の金の瞳が苦痛を受けたように歪んだのを見て、ふいに抑えようの無い怒りが込み上げたのだ。

王だというのなら、何故我々の言葉を聞かなかった。我々を処罰せよと、あれほど願ったではないか。何故それを聞き入れなかったのだ。

掴みかかるカイルや村人を、警護の兵達が引き倒す。冷たい剣が首筋に当たっても、カイルは叫び続けた。

だが本当は自分でも判っていたのだ。その怒りは王に向けられたものではない。それは自分達に向けられた怒りだ。

今更どんな事も叶わない。

自分達を受け入れてくれた友人達は、もはや永遠に失われた。

ふいに扉が開いた。

その兵がどう告げたのかは、はっきりとは覚えていない。

炎を上げ続ける里の中で、赤子の泣き声がする、と——。

引き戻そうとする兵士達を振り切って駆け出した。どれほど森を駆けただろう。

里はまだ、収まる気配を知らない炎の中に沈んでいた。

確かに、泣き声が聞こえる。ともすれば炎と渦巻く風の音に掻き消されそうになりながら、けれども力強く、精一杯の声で泣いている。

生まれていたので。

そうはっきりと意識する間もなく炎の中に飛び込もうとしたカイルの肩を、背後から伸びた手が抑えた。

王はカイル達の脇を抜け、燃え盛る炎の中に足を踏み入れる。

全てを焼き尽くす筈の業火は、王の身体に僅かも触れ得る事なく、その姿は炎の奥に消えた。

何度炎の中に飛び込もうとしたか判らない。その度に、兵士の手がカイル達を引き戻した。

やがて炎の中から王が再びその姿を現した時、王の右腕には、生まれて間もない赤子が抱えられていた。

「——わしらにとつて、あれは命にも代え難い宝となった」

レオアリスが戸外に出て行った後、長い沈黙に沈んでいたカイルが、ゆっくりと口を開く。ロットバルトは瞳を上げ、囲炉裏の傍で背を丸め顔を伏せたままの彼を見つめた。老人は問わず語りのように言葉を綴る。

「ともすれば生への希望を失いかけた我らに、あの子は再び生きる事への

執着を思い出させてくれた。小さかった手があつという間に大きくなり、わしらを助けてくれるようになった。あの子が成長していく様は、絶え間なく浮かぶ後悔と罪の意識とを上回る喜びじゃった」

答えを求めているのではない事は判っていた為、ロットバルトは黙ったまま、カイルの言葉に耳を傾ける。

「快活さや芯の強いところが、父母によく似ておる。誰が教えた訳でもないのに、物言いは時折、あれの父がそこにいるのかと思えるほどじゃ」

その度に沸き起こる悲しみと追憶、刺すような喜び。

「わしらはあの子に過去も、剣士という事すら教えずに育てた。剣士とは何者かを教える者が無い以上、復讐の為にバインドのようになる事を恐れた」

カイルは喜びと疲労の入り混じった声で、静かに語り続ける。

「王はあの子を、わしらにお預けになる形を取ってくださいました。そしてまた、成長した時、望むのであれば、王都へ来させるようにとも。本来ならば処罰されてもおかしくない者に、多大すぎる程の温情じゃ。」

「だが、畏れながらわしらは、王のその言葉すら、あれに伝えなんだ」

王を恨んだ訳ではない。どこか彼の死を悼むような様子をみせた王に、一時の憤りを覚えはしたものの、その憤りが向かうべき場所は違うのだと分かっていた。

ただ王に興味を持てば、いつかは過去を知るだろう。その時が永遠に訪れない事を、村の者全てが願っていた。

「王の御前試合に出ると言った時、わしらは反対した。だが何も知らぬはずであったのに、あれは自分自身の意思でこの村を出て、剣士として覚醒させし、王に仕える事を選んだ。剣士としての血——そうとしか言いようが無い。だとすれば、これもあの子の運命の一つなのじゃろう」

ゆっくりと顔を上げ、ロットバルトを見つめる。そして、静かに頭を下げた。

その先に、王都でレオアリスを取り巻く者達に。

「——あの子を、頼みます」

気が付けばレオアリスが外に出てから、随分と長い時間が経過している。ロットバルトは僅かに思案した後、立ち上がって扉を押し開けた。

途端に、凍るような寒さが身を包む。一度戻りレオアリスの外套を取り上げた。

戸外に出ると、無音の世界が広がる。

雪雲の晴れた夜空に細い月が一つ浮かび、僅かな光で世界を青く照らし出していた。

雪は既に止んでいたが、昼から降り出したとは思えないほど積もり、青い闇の中に薄白く、大地や疎らな家々が浮かび上がっている。少し先の広場に立つ影を認め、ロットバルトは積もった雪に足を踏み入れた。

近寄る足音にも振り向かず、レオアリスはじつと村の奥に広がる山並みを眺めている。

「……そろそろ、お戻りください。そんなに薄着では体を壊す」

「慣れてる」

ロットバルトは苦笑を浮かべた。少し低い位置にある顔には明確な感情は見えないが、彼はいつもそうだ。悲しみや憤りといった負の感情を面表そうとはしない。

それはこの白く無音の世界で育った故なのかもしれないし、周囲に辛い思いをさせない為の、幼い頃からの癖なのかもしれない。

腕を延ばし、外套を掛けると、肩に腕を回す。案の定、それはひどく冷えきっていた。

温もりを覚える事で少しぐらい泣けばいいのだと、そう思う。泣くという行為は、何か一つくらいは、洗い流してくれるものだろう。

だがレオアリスは僅かに身じろぎをただけで、何も言わず、ロットバルトの肩越しに再び視線を山肌に向けた。

その奥に広がる、森に——。

そこに何を見出そうとしているのか。

失われた彼等の姿か、そこに今いるだろう、バインドの姿か。

「——もう、お戻りなさい。あの囲炉裏の傍が、貴方にとって一番暖かい

場所の筈だ」

彼等がレオアリスをどれほど大事に思っているか、慈しみながら育てきたのが、良く分かる。

友人の忘れ形見。

年々育つていく様は、悲しみや後悔よりも多くの喜びを、この村に与えた。

「上将」

「判つてる。もう戻る」

漸く、彼方から視線を外し、それをロットバルトの上に向けた。

「……バインドは、俺が討つ。けど、一つだけ自信が無い」

「何です」

これまで二度、バインドと剣を合わせた時。そして、おそらく明日、剣を交える時——。

それを考えると、怒りとは別の感情が浮かぶ。

それは、悦びだ。

戦う事への——。

『バインドは、狂っ・て・い・つ・た』

「——俺は、狂うと思うか」

自分の剣を止めた相手。剣士として覚醒をしてから、初めての。

あれ以来ずっと、戸惑いや疑問、怒りや悲しみといった感情に寄り添うように、戦いへの悦びがあった。

そして、それこそが、バインドを狂わせたものの正体だ。

「——さあ。絶対と言い切れるものなど無いでしょう」

「……そうだな」

レオアリスは自嘲するように軽く笑うと、家に向かって歩き出した。

「ですが、貴方既に収まるべき鞘をお持ちのはずだ」

足を止めてロットバルトを振り返る。

ふと、祖父の——『彼』の言った言葉が、心に浮かんだ。

『剣に吞まれるな』

レオアリスはもう一度だけ、夜の中に広がる深い森に視線を注いだ。

降り募る雪と灰色の雲の幕の向うで、太陽が次第に高く昇っていく。

レオアリスは戸外に出て雪を踏みしめ、雪雲に覆われた薄い太陽を降り仰いだ。

「昼までには止みそうだな」

一足先に戸外に出ていたロットバルトが振り返る。足元には膝下まで雪が積もっている。

「この足場では、少々動き辛いのでは？」

一歩踏み出そうとするだけでも雪が纏いついて、足は重りを付けたように感じられる。この中で普段通りに動くのは困難だ。だがレオアリスは事もなさそうに首を振った。

「問題ない」

ずっとここで育ったのだ。むしろ地の利はレオアリスにある。

カタリと音をさせてカイルが戸口から姿を現し、レオアリスの前に立つと彼の顔をじつと見つめた。

「……無事に戻れ」

祖父の顔を見つめ返し、レオアリスは口元に笑みを刻んだ。

「心配すんなって。すぐ戻るよ」

飛竜へと歩き出しかけたレオアリスを、カイルが呼び止める。

「何だ？」

カイルは暫らく黙ったままだったが、やがて首を振った。

「いや……」

そして顔を上げ、訝しそうなレオアリスを見上げる。

「一つだけ、伝えておかないだ事がある。本当は三年前に伝えるべきだった事じゃ」

カイルはそれまでの思いを振り切るように、レオアリスの瞳を覗き込んだ。

「レオアリスよ。王がお前を、炎の中から救い上げた。——そして、名をくださった」

レオアリスの張り詰めていた表情の上に、内側から光の透けるような感情が差す。

驚きと、もう一つ、

「名を——」

手足の先に暖かい血が行き渡るような感覚。

それに何と名前を付けられればいいのかは分からない。だが、自分の中にある感情を確かに肯定するものだ。

この村で、王の御前試合があると聞いた時、ひどく急かされる気持ちを感じた事を思い出す。そして、王と相對する時に、常に抱く思い。

尊敬、畏怖、憧憬——ただ一言では、言い表せない感情。

「……その誇りが、お前をこの先、前へと進ませるのじゃろう」

いつか、青年が言った言葉が、カイルの心の中に浮かんだ。

『剣士にとって、剣を捧げるべき相手を得る事は、何にも勝る存在理由だ』

レオアリスは自分の手でそれを見つけた。剣士としての、存在理由を。

ならば、レオアリスがこの村を離れる事が、どれほどの喪失感を伴うものであっても、もうカイルにそれを妨げる理由はない。

「必ず戻れ」

まるでそう言わなければ戻らないとでも考えているかのようには、カイルが念を押す。レオアリスは祖父の様子に安心させるように笑い、背を向けて歩き出した。握った拳を高く掲げる。

「そんなに心配すんなよ。いい知らせを持ってきてやる」

「——」

一瞬、レオアリスの姿に、あの夜の青年の姿が重なる。

鼓動が跳ねた。

カイルが再び差し出した手を、ロットバルトが押さえた。カイルの眼の中に浮かんだ恐怖に似た感情を認め、それを打ち消すように穏やかな笑みをみせる。

「……あまり心配なさらくとも大丈夫でしょう。これは王が彼に与えた任務ですから。王はそれが可能だとお考えです。だからこそ、それに応え

られると、そう思いますよ」

カイルにとつては、それは辛い響きにも聞こえただろう。だが、「剣士」としてのレオアリスにとつて、その事は彼の力となるものだ。カイル自信が一番、その事を知っている。

「……そうかもしれん」

カイルは皺ぶいた顔を伏せ、足元に積もった白い雪を見つめた。

静かに降り募る雪は、全てを覆い隠しても尚満足する事を知らないように、ゆっくりと落ちてくる。

ロットバルトがレオアリスを追ってその場を離れ、彼等の乗った飛竜の姿が雪の幕の向こうへ消えても、カイルはじつと足元の雪を見つめていた。

ごく小さな、誰の耳にも届く事の無い呟きが、雪に紛れて散る。

「――後悔する事、それ自体を避けたい選択は、取り返しのつかない事実を目の前にして初めて、そこに選択が存在していたと気付く。たった一つ、揺るぎなく、取るべきだった正しい選択が確かにあったと」

カイルは静かに瞳を上げ、レオアリスの向かっただらう森の奥へと、視線を向けた。

王が約束し、毎年村へ届けられた書物。王都との交流があつた為か、いつしか周囲の者達から、忌み族という見方も薄れ消えていった。

意識とは単純で愚かだ。

容易く周囲の状況や言葉に流され、向く先を変える。

だがそれを責める気にも、憤る気にもならなかった。

あの場所へ、レオアリスを連れて行ったのは一度きりだ。

幼いレオアリスは、ただじつと不思議そうに、崩れた家々と自分達を見つめていた。何も告げられない事が辛く、その姿を見る事は心に刃を差し込むように耐え難かった。

そこには崩れ、草に覆われた廃墟以外何も無い。

小さな手を握るはずの、力強く暖かい手も、優しく柔らかい手も。

そこに満ちていたはずの、笑い声も。

しんと、雪のように想いは降り続け、心の底に静かに積もり続ける。

静かに、深く、凍り付き、溶ける事を知らない雪のように。

雪に覆われた廢墟の中に立ち、バインドはさも懐かしそうにその場を見渡した。

明け方に再び降り始めた雪は、廢墟を更に白く染め上げていく。

雪が覆っていないければ、崩れて焼け爛れたそれらを見る事が出来るだろう。だが一見しただけでは、おそらくそれが家だった事は分かるまい。

自分がこの手で破壊し、焼き尽くした。ここに住む者達も全て切り裂いた。

あれは、それまでどの戦場でも味わった事の無い感情だった。
快樂。

自分の裡からとめどなく溢れる、切り裂く事への渴望。

落された腕は再生する事はなく、それは抑え難い苦痛を伴った。絶えず痛み続ける傷跡よりも、斬る事を封じられた、その事が強い苛立ちと焦燥を生んでいた。

だが絶望の中、切り刻む事への渴望は、やがて左腕に新たな剣を生んだ。

そして、その剣をかつてのように使いこなせるようになるまで、これだけの時がかかったのだ。

あの時、右腕を切り落とした、青白い剣風――。

バインドは瞳を上げ、雪に覆われた木立の間を透かし見た。

もう、ここに来る。近づいて来るのが感じられる。

愉快が、その頬に踊った。

あの年若い剣士は、十七年前に斬った剣士よりも強いだろうか？

あの剣士は強かった。初めて、あれほどの相手に出会ったのだ。

力は拮抗していた。いや。

あの男の方が自分より上回っていた。

一瞬でも気を抜けば、切り裂かれていたのはバインドの方だっただろう。

その事が逆に、バインドの中にこの渴望を目覚めさせたのだ。

それまでの戦いは、ひどく退屈だった。力を出し切れる相手などどこにもいない。敵を切り裂く事は、まるで単純な作業のようだった。

だがそれなら自分は何の為に存在しているのか。
生も死も賭けられず、戦う相手も無い。

自分の存在が空虚なものに思え、全てが煩わしかった。
そんな時に目の前に現れた剣士。

剣を弾かれ、受ける都度、力が増していくのを感じた。

それでもあのままの状態であれば、自分が今生きていたかどうかは分からない。それもまた悪くはなかっただろう。

だが、あの時――ただ一瞬だけ、あの男の視線が逸れたのだ。

遠く離れた森の方角に、ただ一瞬。

何の為かは分からない。だがその剣の持つ力を、一瞬だけそこに向けた。
それで、勝敗は決した。

ただ一瞬のうちに、生と死は逆転し、バインドは呆然と足元に倒れた男の身体を眺めていた。

何が起こったのか、理解できなかった。

勝利の喜びなどない。虚ろな心の中に沸き起こったのは、怒りだ。

何があの男の気を、自分から逸らした？

自分との戦い以上の、何があるというのか。

勝利に駆け寄った副将を切り捨てた。

驚き、そして憤り、それから恐怖の内に逃げ惑う自軍の兵士達を、目に

つくものから全て切り裂いた。

周囲が何百、何千という死体で埋まっても、苛立ちは収まらなかった。

そうして、森に、あの男の視線が向いた方角に向った。

無性に知リたかった。そこに何があるのか。

辿り着いた里で他の剣士達と戦った。右腕の剣は男との戦いで既に限界に近づいていたが、さほどの手間はかからなかった。家々を破壊し、捜し回った。

剣士達が護る先に、目指すものが在るはずだ。

剣から迸る炎が自分の周囲を焼き始めるのにも構わず、ただそこを目指した。里の者全てを切り伏せ、その先にあった家の壁を吹き飛ばした。

崩れ落ちる石となだれ込む炎の中、女が一人、立っていた。

たった今まで床に臥していた様子でひどく弱っていたが、それでも剣を手にし、決然と光を宿した瞳で、自分の前に立ちはだかる。

女の後ろに、小さな白い布の包みが置かれていた。

そこだと、判った。

女を切り裂いた瞬間、その背後から青白い光が膨れ上がり、右肩に鋭い衝撃を感じた。女が制止の声を上げ、その光を隠すように覆い被さるのが見える。

あの男の剣と同じ光――。

気が付いた時には、どこか見知らぬ場所にいた。

激痛に目をやると、右肩から先が無かった。

右肩に左手を当てる。バインドは失われたはずの腕が齧す痛みを、愛おしむように撫でた。

肩に注いでいた視線を上げる。

その先に、長い間待ち続けた者の姿があった。

六

飛竜の背に立ち、レオアリスは眼下を見渡した。

深い森の中に、ぼっかりと白く開けたその場所。たった一度、訪れただけの、心の奥深くに宿る場所。

レオアリスにとつての、全ての始まりの土地だ。

その廃墟の中心に、既に見知った剣の気配がある。

追憶よりも、思慕よりも、その事が今のレオアリスの中を大きく占めていた。

吹き付ける雪に黒い髪を巻き上げながら、その一点だけを睨む。

「ロットバルト、お前は村で待て」

バインドを倒すには、全力を以て当たらなければ難しいだろう。周囲への影響は考慮しきれない。

「……いえ。見届けるのも私の役割です。私に関してはお気遣いなく。まあ私も命は惜しい、安全圏は見極めますよ」

ロットバルトらしい言い草に、レオアリスは視線だけを背後に向け苦笑を洩らした。結果がどうあれ、王都への報告は必要だろう。

「損な役回りだな」

「お陰さまで」

皮肉めいた口調を返すと、レオアリスはもう一度笑った。左腕を胸に充て、ロットバルトが深く頭を下げる。

「――ご武運を」

一度だけ頷き、レオアリスは飛竜の背を蹴った。

鳩尾に当てた右手が、ずぶりと手首まで埋まる。青白い光が零れ、地上に落ちていく雪に反射し拡散しながら大気を染めていく。

剣を抜き放つと同時に、雪を巻き地上へと降り立った。

廃墟に腰掛けていた男が風に揺れる柳のように立ち上がる。

青白く光を纏うレオアリスの剣に呼応するように、バインドの左腕が赤く光を宿す。

艶の失せた黒い前髪の奥で、バインドの瞳が愉悦の色を浮かべた。

「随分と待たせるじゃないか、師団大将。王に敵するものを迅速に排除する。それが近衛師団の本分だろう」

レオアリスは無言のまま、バインドに向って歩を進める。バインドはまるで、レオアリスが自分の元へ来るのを待ち構えるように動こうとはしない。二人の間には雪が薄い幕を掛けている。一步進むごとに、白い幕は薄くなり、互いの輪郭を浮き上がらせていく。

「師団は居心地がいいか？ そうだろうなあ。……思う存分、切り刻める」
「……俺は、お前とは違う」

「違う？ クク、違わないさ。剣士の本分は戦う事だ。それ以外はどうだっていい。敵を切り刻む事こそが、剣士の存在意義だ。俺は時に、この意識すら鬱陶しいよ」

低く這うように、冥い喰い声が響く。光を吸い込んで閉ざした闇色の瞳が、レオアリスをひたと捉える。

「お前は剣士だ。それは変えられない」

「お前に言われるまでもない」

剣の間合い、その少し手前で、レオアリスは足を止めた。
バインドが肩を竦める。

「つれないな。俺は常に、お前の事を考えていたのになあ」

射るような視線を感じながら、バインドは腕の欠けた右肩を撫ぜた。

「十七年前のあの時から、片時も忘れた事など無かったよ」

そこに宿り続ける痛み。戦いへの、それは悦びだ。

じわり、とバインドの左腕が紅く光を増した。

肘から先の骨が盛り上がり、軋む音を立てながら、次第に炎を纏う長剣へと姿を変えていく。バインドへと降り掛かる雪が、その身体に届く前に溶けて消える。

「夢にまで見た。腕が疼く度に、どう切り刻んでやろうかと、そればかりを考えていた。——お前が師団にいると知った時の、俺の喜びが分かるか？」

レオアリスは無言のまま、バインドに視線を据えた。バインドの口元の笑みが、更に深く吊り上がる。

「これでこの痛みを満足させてやれる。しかも、師団？ 最高の舞台じゃないか、なあ？」

剣を伝って零れた焔が、雪の上に滴った。

バインドとレオアリス、互いの剣が同時に振り抜かれる。

雪を蹴立てて走った剣風が中央でぶつかり、弾ける。轟音と共に衝撃が大地を穿ち捲り上げた。

それを合図に、二人の足が雪面を蹴る。

雷光と紅煉、対照的な二つの閃光が尾を引いてぶつかる。

鏢元を打ち合わせ、刃の向うの瞳を覗き込んだ。

ロットバルトは廃墟を望む張り出した山肌の上に飛竜を降ろした。十分に距離を取ったその場所にまで、二人の剣士が放つ圧迫されるような波動が伝わる。

こうした離れた場所からでなければ、剣筋を眼で追い切る事すら難しい。どちらに分があるのか、眼下に広がる戦場は、全くの互角だ。

（まだ双方とも力を抑えている状態だろう。ただ）

バインドの剣に些かの躊躇いもないのに比べ、レオアリスの剣はどこか迷うように見える。経緯を知っているが故の杞憂に過ぎないかもしれないが、おそらくそこそこの戦いの最大の懸念だ。

『俺は、狂うと思うか？』

レオアリスがそれを消化出来たのかは、今朝の彼の様子からは判断が付きかねた。

ハヤテが不安そうに喉を鳴らす。それを宥める為に片手を飛竜の首に置き、ロットバルトは戦場へ視線を向けた。

閃光が奔る。

剣を弾き、流し、斬り上げる。胸元で止められた刃を反して薙ぐ。

互いの刃が上段かと思えば下段へ、流星のように尾を引く。剣が翻る都

度、周囲の木立が切り裂かれて倒れ、大地が削られた。黒森が苦痛を受けて騒めく。

剣を撃ち合わせ、一瞬互いの視線が交叉する。同時に弾き上げて跳び退き、後ろ足で地面を蹴った。

鋭い音が響き、互いの足元で剣が交叉して止まる。

二人の間の地面が衝撃を受けて陥没した。

身体を入れ替え、再び距離を取る。

残響が、一瞬の内に静寂を取り戻した廃墟の中に冪して消えた。

ゆらりと上体を起こしたバインドの口元に冥い笑みが湧き上がる。肩が

僅かに震え、それは次第に大きくなり、高い哄笑に変わった。

「はははっ！——いいなあ、これだよ。俺は長い間、ずっとこれを待っていた。この俺と、再び剣を合わせられる相手を……！」

ゆつくりと、左腕の剣を目の前に掲げる。剣を縁取る赤い焰が、喜びに震えるようにざわざわと揺らぐ。

「お前も、そうだろう……！」

「……言っただけだ。俺は、お前とは違う」

不快さを隠そうともせず、レオアリスはそう吐き捨てた。だが、剣を合せている間、ずっと身の内に沸き上がってくるもの。

愉悦。

闘いへの——。

二つの思いがある。

警鐘を打ち鳴らすものと、食欲にその愉悦を欲するもの。

「考えるな」

バインドが動く。

先程よりも疾い剣戟を剣の平で流すように手の内を反し、レオアリスはそのまま弧を描いて斬り下ろした。切っ先がバインドの脇腹を掠めた。

初めて、赤い血が散る。

バインドは後方へ跳び、雪の上に片膝を付いた。僅かに掠めただけの刃の凍るような痛みに、瞳を細める。捉えられれば確実に、二つに切り裂かれるだろう。

だがまだバインドの望む存在には足りない。生と死を垣間見る、その戦いこそがバインドの望むものだ。

それだけが、自らの存在を満たす。

それ以外は必要ない。

右腕が存在を訴えるように軋んだ。

「——まだ、足りないな。その程度じゃあ期待外れだ。……お前の目を覚まさせるには、何が必要だ？ 怒りか」

身を起こし、バインドは脇腹から流れ出る血に目を細め、にいつと笑った。瞬く間に血が止まり、傷口が塞がっていく。

「お前のその剣、その青白い光。覚えてるよ。……昔話をしようか……？」

「必要ない」

振り抜かれたレオアリスの剣を、赤い刃が受け止める。バインドは剣を反すと、レオアリスの剣を巻くようにして足元の地面に押さえ込んだ。

レオアリスに退く間を与えず、剣を跨ぐように踏み出し体重を乗せる。

「っ」

バインドがぐいと顔を寄せた。見開かれた瞳の中に、狂気と愉悦が仄見える。

「まあ聞けよ。お前にも懐かしい話だ——。俺が初めて戦った剣士。この地で反乱を起こした剣士の一族の一人だ。そいつが一番強かった。美しい長剣を持っていてなあ。青白い光を纏う……お前のこの剣のように」

レオアリスの瞳を捉えたまま、口元が歪んだ笑みを浮かべる。

「そいつとの戦いが、俺の中の欲望を呼び起こした」

「……黙れ」

「剣士の本能——切り刻む悦びだ」

「黙れ！」

レオアリスは弾かれるように叫んだ。バインドが嗤う。

「お前の、父親だよ！ 似ていたぞ、お前に、よおく！」

抑えられていた剣が足元から跳ね上がった。バインドの腕が高々と上がる。

振り下ろされた剣に、バインドの身体が真っ二つに割られたかに見えた。衝撃を受けて、大地に深い亀裂が走る。巻き上がった雪と土砂の中に踏み込んだレオアリスの背後で、嘲笑が響いた。

「お前の父親を殺すのは楽しかったよ。感謝してるんだ………おかげで俺は、剣士とは何者かを知ったんだからなあ！」

目の前が怒りで霞む。剣が大きく脈打ち、引きずられるように振り抜いた。バインドの背後の木々が薙ぎ倒され、積もった雪の上に崩れる。

二の太刀、三の太刀を軽くいなし、バインドはレオアリスの懐に踏み込んだ。

「！」

バインドの剣が紅く輝く。右下から剣が振り抜かれる。刃より熱の塊を叩きつけられるような感覚だ。

辛うじて防いだ剣もバインドの剣の勢いを殺しきれず、レオアリスは後方へと弾かれた。

木の幹に肩と頭を打ち付け、一瞬意識が遠退く。

薄れかけた視界に紅い光が過る。

「っ」

反射的に木の幹を押すように離れた場所を、焰が碎いた。

バインドが間合いを詰め、迎え打つレオアリスの剣を弾く。そのまま手を緩めず、鋭い切っ先がレオアリスの身体を掠めた。

「くく、どうした？ 剣が鈍いな」

躲しているにも関わらず、焰の熱が皮膚を焦がすのが判る。それだけで体力が消耗していく。

バインドが一步踏み込むごとに、レオアリスは後退する。

逸らしたレオアリスの首を剣が掠め、切れた服の襟元から蒼い石の付いた鎖が覗いた。

「へえ」

バインドが面白そうに瞳を見開く。

退こうとした肩が木の幹にぶつかって漸く、自分がいつの間にか木を背後にしているのに気付き、レオアリスは舌打ちした。だが崩された感覚を

取り戻そうとしても、沸き上がってくる怒りが邪魔をする。

バインドがずい、と踏み込み、剣を突き出した。左に抜けようとして、木の幹に突き立った剣に絡まった鎖に引かれ、がくと身体が止まる。

レオアリスは木の幹を背に振り返り、バインドと正面から向かい合った。バインドの瞳が細められる。

「……なつかしいな、この飾り。お前の一族の紋章じゃないか？」

じり、と剣の当たっている鎖と首の皮膚が焦げる。

キン、と小さい音がして鎖が千切れた。剣先に弾き上げられ、反射的に追った手を、バインドの赤い刃が切り付ける。

咄嗟に躲したものの、右の二の腕が深く裂け鮮血が噴出し、足元の雪を紅く染めた。

腕を抑えながら、離れた雪の吹き溜まりに落ちた鎖を、レオアリスの視線が追う。その様子をバインドが面白そうに眺めた。

「気になるか？ そうだろうなあ。あれはお前の父親のものだ。よく残っていたもんだ。——青い石のものはその長だけが持つ。今のお前に相応しいじゃないか」

バインドの哄笑が廃墟の中に響いた。

「たった一人だもんなあ？！」

雪を吹き上げて剣風が走る。だが切り裂いたのは、バインドの残像のみだ。バインドの姿は視界から消えている。

移動する気配を追いながら、レオアリスは大きく息を吐いて呼吸を整える事に集中する。

『殺せ』

じわり、と心の中に浮かび上がってくる、殺意。そしてその喜び。それらが自分を支配しようとして沸き上がる。

（——邪魔を、するな！）

気配は、上だ。

鋭い金属音とともに、頭上に振り上げた剣が、打ち下ろされたバインドの剣を弾く。

踏みしめた足元が雪に取られ、体勢を崩したレオアリスの上に、新たな剣戟が振り下ろされる。逸らした左肩に焼け付く痛みが走った。

予期した追撃はない。体勢を直したレオアリスの周囲で、バインドが嗤う。

「……余計な事を考えていると死ぬぞ。剣も満足に振るえないまま死なれちや、この俺が十七年待った甲斐が無い。……まだ後押しが必要か？」

振り返り様、叩きつけるように振り抜かれた剣が、バインドの頬を浅く切り裂く。赤い血が飛び散り、花卉のように雪の上に散った。

バインドは身動きもせず、レオアリスの剣先をちらりと眺めた。腕が血を拭いとると、既にそこに傷は無い。

「しつかり狙えよ。……なあ、お前の父親は強かったぜ。この俺よりも……」

喉の奥で嗤いを転がす。

バインドの剣がレオアリスの右腕と胸を掠める。熱を受け、レオアリスの瞳が軋んだ。

「それで何故俺が今生きているか、教えてやろうか」
打ち込んだ剣はバインドの左手に弾き返される。バインドは大きく踏み込み、間合いを詰めた。

「……一瞬だけ、奴は何かに気を取られた。そこに力を向けた。気に食わないよなあ。俺との戦い以上の、何があるっていうんだ？ ……俺は、その何かを探した」

その言葉を聞くなと、心の奥で警鐘が打ち鳴らされる。

だが聞くまいとしても、塞ぐ術などなく言葉は自然と耳に入り込む。

レオアリスの剣が正確さを欠くのと反比例するかのようになり、赤い剣が、浅く、だが確実に、レオアリスの身体に熱を刻み付けていく。

「そして、剣士の里で……ここで、それを見つけた」
聞くな。

脳裏に青い光が過ぎる。

自分を押し留めるように、暖かく包んだ光。
バインドの声が低く、愉悦を宿して蛇のように這う。

「赤子だった——」

青い。
聞くな。

「——お前だよ」

びくりと震え、レオアリスの剣が動きを止めた。
俯いたその右肩を、バインドの剣が貫く。更に剣を深く押し込むと、臍が千切れ、骨を削る音がバインドの耳にも届いた。

噴き出すはずの血が、剣の纏う炎の熱で赤く蒸発する。剣を握った右腕が、力を失ってだらりと下がった。

俯いたレオアリスの表情は見えない。

バインドが剣を引き抜くと、つられるようにレオアリスの膝が雪の上に落ちた。

右肩を覆う激痛にも苦鳴すら上げず、俯いたまま動かない姿を見下ろし、バインドは苛立つようにその瞳を細めた。

「早くしろ。それとも、終わりか？」
紅い剣が、レオアリスの頭上に持ち上がる。それでもレオアリスは身動きすらしない。

その内面を現わすかのようになり、手にした剣からは光が失せている。

バインドは鋭く舌打ちをし、振り上げた剣に力を籠めた。

「つまらねえ……。死ぬ」
翼の羽ばたきが凍る大気を打った。

銀の鱗が光を弾き急降下する。顔に掴み掛かった鋭い鉤爪を躲し、バインドの剣が飛竜へと動く。剣が飛竜を捉える寸前で、鏢を弾く音と共に白い閃光が走った。

首許に伸びた白光を後方に飛んで避け、バインドは笑みを浮かべたまま顔を向けた。首に浮かび上がった赤い筋をなげる。

鞘走らせた剣を納め、ロットバルトは再び柄に手をかけた。

「……面白い太刀筋だなあ。惜しかったか？」
「全く。限界ですよ」
向かい合うと、じわりと圧迫感が身体を包む。レオアリスの剣と対する

時とは違う、狂気を孕んだ剣気に、ロットバルトは無意識に退こうとする足を押し止めた。

バインドは光の無い闇色の瞳を、膝を付いたままのレオアリスと、正面のロットバルトに交互に向ける。

「剣士同士の戦いに、不粋だとは思わないか？」

「べらべらと、埒もない事を捲し立てる貴様よりはマシだ」

不愉快な響きを隠しめせず、ロットバルトはバインドを睨み据えた。

「クク……」

バインドはチャリと上空に視線を飛ばした。飛竜が再びバインドに掴みかかろうと旋回する姿を捉え、嗤う。

「——余計な手出しをしなればいいものを。まあ、お前等の死もまとめ、レオアリスにくれてやるのもいいかもなあ？」

バインドが一步踏み出す。それだけで強烈な圧迫感が叩きつける。

更にもう一步——だがロットバルトの間合いには足りない。ロットバルトを相手に、バインドに間合いなど関係ないだろう。バインドが剣を一振りすれば、それで終わりだ。

ロットバルトは鞘を強く握り込み、バインドに視線を注いだまま距離を測った。

あと数歩踏み込んでくれば剣が届く。それを待つだけで激しい消耗を覚えた。

レオアリスは雪の上に膝を付いたまま、動く気配すらない。

ロットバルトはバインドを退かせる方法を探して思考を巡らせる。

バインドがもう一步、歩を進めた。

じり、と冷たい汗が額を伝う。

バインドが再び踏み込む。

(チ)

何の策も浮かばないまま、左手の指が剣の鏢を弾きかけた、その時。

一瞬、大気が震えた。

二人の視線が吸い寄せられるように一点に向けられる。

レオアリスの身体を青白い光が覆うように包んでいる。

レオアリスの剣が纏う、剣光。

ふいに強烈な圧迫感が、レオアリスの身の裡から膨れ上がった。

剣光が爆発するように急速に広がる。光に触れた瞬間、ロットバルトは弾かれ、後方に飛ばされた。

「っ」

雪に片手を付き、霞む頭を振って顔を上げる。視界の先、先程までと変わらない位置に、レオアリスが立ち上がっているのが見えた。

陽炎のように青白い剣光がその身体を取り巻いている。

バインドもまた、弾き飛ばされたその場で、レオアリスの姿を捉えた。

驚愕に見開かれた瞳が、次第に再び強い愉悦の色を滲ませる。

レオアリスはその場に立ったまま動かない。だが、その足元から、ゆっくりと、放射状の亀裂が広がっていく。

右手に剣を掲げたまま、レオアリスの左手が持ち上がり、鳩尾の上に置かれた。

ずぶりと沈み、光が溢れる。

白い世界が、青く染められていく。

再び、左手が引き抜かれる。

ゆっくりと現れたのは、右手の剣を映したかのような、青白い光を纏う長剣だ。

ロットバルトが息を呑む。

レオアリスの剣は彼の十三対目の肋骨——即ち、二本。

だがこれまでの戦いで、レオアリスが二本の剣を持つ所を、ロットバルトは見た事が無かった。

強い不安が胸に灯る。

『俺は、狂うと思うか？』

ミストラの時とは違う、だが確かに、レオアリスが纏う強烈なまでの鬼気は、普段見知ったものではない。

レオアリスの負った傷が、瞬く間に癒えていく。

「……ク……ハハ、ハハハハハ！ 待っていた、待っていたぞ、これを！ ……漸く、会えたなあ！」

感に耐えないというようにバインドが喉を震わせた。立ち上がり、レオアリスに向かつて歩き出す。

「さあ、思う存分戦おうじゃないか」

バインドの剣が熱を増す。たちまちの内に周囲の雪が溶け、乾き始めた。

周囲には静寂が満ちていた。

目の前に赤い一本の剣が浮かび上がっている。

（――何をするんだっけ？ ……ああ）

バインドが頭上から剣を打ち下ろす。レオアリスの右手の剣がそれを受け止めた。

感じるのは、悦びだ。

解放と、――目の前の戦いへの。

沸き起こる、歓喜。

（こいつを、斬ればいいのか）

にい、と口元に笑みが刻まれた。

受け止めたバインドの剣を、軽く、ほんの僅か、跳ね上げた。その動作に、逆に体勢を崩され、バインドがよろめく。

レオアリスの左腕が動いた。

閃光のように打ち込まれた剣をかるうじて受け止め、バインドが後方に吹き飛ばされる。

防いだはずが、バインドの胸から腹にかけて深い傷が走った。吹き出した血に、驚きと、

悦びがその顔を彩った。

剣が赤々と焔を纏う。

廃墟に、赤い光が渦を巻いた。剣から散った焔が廃墟を覆う雪に灯り、四方に走る。

「懐かしい光景だなあ。まるであの時に戻ったみたいじゃないか」

レオアリスの足元を焔の舌が舐める。蒸発していく雪の下から黒い土と、焼けて崩れた石が覗く。

「この墓場に相応しいのは、俺か、お前か」

バインドの足が焔を蹴る。レオアリスの右後方へ、一刀に間合いを縮めると、剣を斬り上げた。焔が迸り、大気を焦がす。

振り返りもせず、レオアリスは右手を動かした。

バインドの剣はレオアリスの背後で、その剣に阻まれて止まった。

剣に触れた瞬間、バインドは弾き飛ばされ、廃墟の中に叩きつけられた。

刃を下に向けたまま、レオアリスが身体の前に二本の剣を掲げる。

剣は引き合うように重なり、そのまま一振りの長剣に姿を変えると、強い光を発した。

目の前に浮かび上がった剣の柄を、光の中に延ばされたレオアリスの右手が掴む。

剣の纏う光が、主の手の中に収まり、一瞬輝きを増した後、静まった。

例えようもない圧迫感が周囲を取り巻く。

大気の振動が、離れた所にいるロットバルトにまで伝わる。

無造作に剣を一閃させると、生じた剣風が周囲の木立を断ち、その奥の山肌を穿った。

レオアリスがひどく酷薄な笑みを刷く。

「――それが、完全な姿か……」

バインドは目の前の剣士を、ただ陶然と眺めた。

剣が、届かない。

剣を打ち合わせる、それすら適わず自分の剣が空を切るのを、バインドはどこか敬意すら抱いて眺めた。

横薙の剣の回転をそのまま乗せ、左足を軸に踏み込む。袈裟掛けに振り

抜かれた剣には、やはり何の手応えもなかった。

バインドの顔を、今までとは違う笑みが彩る。右肩を覆い続けていた痛みは、既に無かった。

戦いは、バインドにとって生命だ。

死を感じるからこそが生命だ。

漸く、今再び、生を得た。

青い光を視界の隅に捉え、バインドは咄嗟に上体を反らした。今まで首があつた場所を、剣風が抜ける。

戻した上体の、すぐ前に、レオアリスがいた。

黒い凍るような瞳と、酷薄な笑み。

何の予備動作もなく至近から打ち込まれた剣を、バインドの左腕が迎え撃つ。

くぐもつた、嫌な音が響いた。

「！」

剣の衝撃を殺せず、バインドは地面に叩きつけられた。

砕けた左腕を、驚愕に見開いた瞳が見つめる。

「はは」

顔を上げた視線の先に、レオアリスの姿はない。気配を感じて動こうとした瞬間、足が左腕を押しえ付けた。

青白い剣が首筋にひやりと当る。

バインドとレオアリス、二人の視線が合わさる。

笑った。

七

骨を断つ鈍い音が、ロットバルトの許まで届いた。

断ち切られた首が雪の上に転がる。

ロットバルトの位置からは、佇んでいるレオアリス後ろ姿が見えるだけで、その表情は判らない。

ひきつっていたバインドの身体が、やがて静かに動きを止めた。

「つまらないな。もう終わりか」

その声はぞつとするほど無機質な響きを持っていた。

先程までのバインドとの戦いは、互いの力がほぼ拮抗していた。

二本目の剣の出現、全能力の解放がここまでの差をもたらす事になるとは、おそらくバインド自身想定していなかっただろう。

それとも、それがバインドの望みだったのか。

(どうなった……?)

あの感情を欠いた声の響き。

レオアリスが頭をもたげ、ゆっくりと視線を巡らせる。

ロットバルトは知らず、剣の鞘を左手で挿んだ。冷えたその感触に気付いて笑う。

普段のレオアリスからは感じる事のない、心臓を撫ぜるような恐怖がその場を満たしている。

このまま放っておけば、切り裂くものを求めて、眼にするもの全てを滅ぼすだろう。バインドのように。

だが今この場には、ロットバルト一人しかない。

(……俺が、止めるか?)

止められる可能性があるのか。

(——全く、自信が無いな)

自分一人で止める自信どころか、大隊一つ手にしていた所で何の勝算もない事は、バインドが証明している。

だが、すぐにでもレオアリスはロットバルトを見つけられるだろう。今のレオアリスにどれほど彼の意識があるのか、この場からは想定が付かない。

どうすれば戻る？

(剣を手放させるしかない)

最も単純で、最も効果的だ。

どうやって？

「知るか」

価値の無い自問に、自嘲気味に笑う。

レオアリスの視線がロットバルトを捉えた。

ふ、とレオアリスの姿が消えたと思えた瞬間、目の前にその姿があった。

上げられた漆黒の瞳と一瞬視線が重なる。

何も考える間もなく、身体だけが動いた。

地面を蹴ったその後を追って横薙の閃光が走る。

咄嗟に立てた剣が、砕けた。

(しまっ)

剣風に弾かれ、後方の森へ弾き飛ばされる。

「っ」

雪の上に全身を叩きつけられ、ロットバルトは激しく噎せ返った。

先程の位置から再びレオアリスは一息に間合いを詰めた。

呼吸を失ってその場に沈み込んだのが幸いした。

横薙の剣がロットバルトの頭上を抜け、背後の木々が衝撃と共に断ち切られる。

息をつく間もなく振り下ろされた剣が、ロットバルトの首の横で止まった。

剣のひやりとした感覚が皮膚に伝わる。

自分の首と胴が未だに繋がっている事に、どこか他人事のように不思議

さを覚えた。

だが剣は止まったまま動く気配が無い。

首筋で剣が小刻みに震えるのを感じ、ロットバルトは視線を上げ、レオ

アリスを見た。

レオアリスの瞳が軋む。見慣れた感情の色が、僅かにその瞳に揺らいだ。

噛みしめられた唇から、擦れた声が途切れ途切れに押し出される。

「……離、れる……っ」

閱ぎ合う意識を表わすように、剣を握った右手を、左手が押さえ込む。

レオアリスはよろめくように、数歩後退った。

(……まだ——)

先程の初太刀を避けられたのも、この為だ。

まだ完全にレオアリスの意識が消えた訳ではないのだ。

止めるなら、今を置いて他にはない。

だが幾度思考を巡らせても、自分の今の能力を考えれば答えは全て、否

だ。比較にならない。

それでも、ただ殺させる訳にはいかない。一旦身近な者を斬れば辛うじ

てかけられている枷は外れ、もはやレオアリスは自分を押し止める事はで

きないだろう。

一つだけ、賭けのような方法がある。

(気休めに近いな)

それでレオアリスの意識が戻る確率など、握った砂の一粒もあるかどうかだ。

だが、きっかけにさえなればいい。自らの意志で剣を抑えない限り、レ

オアリスの意識を戻す他の方法はない。

それを搜して視線を巡らせ、ロットバルトは息を呑んだ。雪を踏んで、

ゆつくりとこの場に近づいてくる者がある。

カイル——レオアリスの祖父だ。

右手に丸い香炉を提げている。

来るなど、喉元まで込み上げた声を飲み込んだ。刺激を与えるのは避け

たかった。レオアリスはまだ背後に気付いてはいない。

(何をするつもりだ……?)

カイルは足を止めると低く何かを呟いた。その詞に合わせ、提げていた

香炉から薄紫の煙が溢れ出し、雪の上に落ちると言うようにレオアリスの

足元に漂っていく。

それは足元からゆつくりと、レオアリスの身体を絡めとろうとするかの

ように立ち昇った。

ロットバルトの許にも煙がじわりと這い寄る。足先に僅かに触れたそれは、ひどく重量感を伴う。咄嗟に足を引いたものの、触れた瞬間頭の奥が鉛のように重くなった。おそらくは捕縛用の術なのだろう。

煙を嫌い、レオアリスは身体を振る。だが絡み付いた煙に繋ぎ留められたかのように、脚は動かない。

脚に、腕に絡み付いた煙が厚みを増す毎に、剣がじり、と下がった。

上体が揺れ、雪の上に膝が落ちた。

(……成功したのか?)

煙は途切れる事なく、屈み込み動きを止めたレオアリスの背に纏いついていく。

じわり、とレオアリスの中に怒りが生まれる。手足が痺れるように重く、鉛を括られたように動かない。

苛立ちと怒りが胸の奥に渦巻く。

自分を抑え込もうとするのは何だ?

背後に、何かの気配があった。

邪魔だ。

雪についた右手が、剣の柄を握り込んだ。

レオアリスが動かなくなったのを見て、カイルは大きく息を吐いた。掲げた香炉を下ろそうとした瞬間、青白い光が走り、手にした香炉を砕いた。

「!」

衝撃でカイルが雪の中に倒れ込む。

身を起こし向けた視線の先で、レオアリスの身体が重い戒めを纏ったまま、ゆっくりと立ち上がる。

取り巻く煙を断つように、身体の周囲を剣が一閃した。

煙が掻き消える。

(やはり、抑える事は出来ぬか)

カイルは予め分かっていたかのように、僅かに笑った。

恐らくは、抑える事は不可能だろう、と……。

ふと、瞳を見開く。

ならば何故、自分はこの方法を選んだのか。

自分の邪魔をしていた相手に向って歩く。

目の前まで来ても相手は動く気配もない。簡単に斬れる。

それは少し、つまらなかった。

——違う。

心の奥に浮かんた声を見無視して、剣がゆっくりと持ち上がる。

凍える冬に自分を暖めた腕。

目の前にいるのは。

剣が切り裂く事への喜びに満ちる。

囲炉裏の傍で、そのしわがれた声が語る言葉に耳を傾けた。

剣が、動きを止めた腕に苛立つように震えた。

目の前の相手は逃げる気配すら無い。

斬れ。

剣の歓喜が全身に流れ込む。

……何で——。

胸の奥底で、微かな悲鳴が響いた。

何で、逃げてくれない。

無造作に、右腕が上がる。

カイルは少しも身動きする事なく、ゆるやかに持ち上がる剣を見ていた。

これが自分を斬れば、もはやレオアリスは止まるまい。

そうさせてはならないという想いの奥底に、小さな硬い石のようにこ

ごった固まりがある。

それが自分に裁断を下すのを待っている。

彼らが去って長い間、口に出されないままに、ずっと抱き続けてきた想い。

幾度重ねても、どうやっても、思考はそこに戻る。

我々はやはり、忌み族だったのだと。

関わるものに禍を呼ぶ。

何故、生を求めてこんな地まで来てしまったのだろうか？

もっと早い段階で諦めるべきだったのだ。

自分達の足掻きが呼んでしまったもの。

ずっとどこかで死を望み続けてきた。

もうすぐ、それが訪れる。

一番、相応しい者の手によって。

カイルは剣が振り下ろされるのを待つように動かない。その姿に、ふいにロットバルトの中に憤りにも似た感情が沸き上がった。

『あの子を、頼みます』

あれは、そういう意味で言ったのか？

『我が子』を想う親の願いではなく？

(——冗談じゃない。そんな頼まれ方は御免だ)

雪に覆われた木立の間に視線を走らせる。探しているものはすぐに見つかった。

いつの間にか晴れ上がった空の光を受けて、鮮やかに輝く。

走り寄り、雪の上に落ちていたそれを取り上げると、ロットバルトは二人へと向き直った。

今にも振り下ろされそうな剣。

微かに震える腕が、レオアリスの中の葛藤を伝えている。

カイルにはそれが見えていないのか。

「止める！ あなた方が望んだのは、そんな事では無いはずだ！」

鋭い声がカイルを思考から引き戻した。レオアリスの後方にロットバルトの姿がある。

その手が投げた何か、陽光を弾いてカイルの手の中に落ちた。

剣の意匠に、青い石の飾り。

目の前のレオアリスの姿に青年の姿が重なった。

『忌み族？ 迷信なんて大体そんなもんだ』

『伝えたいのは——』

「あ、あ」

自分は、何を、しようとしていた？

この、何よりも大切な、彼等の忘れ形見。

それを——。

見上げたレオアリスの瞳の中に激しく閃き合う色がある事に、カイルは漸く気付いた。

どうして今まで見えなかったのか。

そこにあるのは、怒りでも憎しみでもない。

苦痛にも似た、悲しみの感情だ。

今にも泣きだしそう。

無造作に上げられていると思った剣に込められた、二つの力。

振り切ろうとするものと、押し止めようとするもの。

それを目にした瞬間、カイルは腕を延ばして目の前の身体を抱き締めた。引き絞られ、限界に達した弓のように、その上に剣が落とされた。

抑えがたい衝動が、鼓動に合わせて吹き上がる。

止め処も無く生まれるそれは、解放を求めてレオアリスの意識を揺さ振り続ける。

千切れそうになる意識を繋ぎ止める為に、精神は急激に疲労していく。

目の前に祖父がいるのは判っていた。抑えようとする腕を無視し、切り

裂く相手を求め、剣が歓喜に震えて持ち上がる。

抑えようとするとこの腕に力が入っているのだろうか。

そもそも、自分は抑えようとしているのか？

斬りたがっているのは誰だ。

——いやだ。

剣の歓喜が膨れ上がる。

目の前にいるのは、自分を育ててくれた親だ。

——嫌だ、止めてくれ！

剣が落ちる。

意識が、弾けた。

八

ふいに、辺りが静寂に包まれた。

真っ白い雪の中に誰かが立っている。

『——悪かったなあ。俺はお前に、何一つしてやれなかった』

初めて聞く声。少し低い、どこか陽気な響きだ。

『でも、楽しみにしてたんだぜ？』

その姿は雪に乱反射する陽光に阻まれ、はっきりと見る事はできない。

自分にやはり似ているだろうか。

(——幻だから、分らない)

現実では在り得ないのだから。

それでも、胸には締め付けられるような、哀しみと喜びが満ちている。

『名前もやれなかったな。……でも、お前は王から名を貰ったろ』

軽やかに笑う。

『レオアリスか。いい名じゃないか』

男の手が、剣を握ったままのレオアリスの右手に置かれた。

温もりが置かれた手から静かに伝わる。

鮮やかな漆黒の瞳。

『——剣に吞まれるな』

ゆっくりと、穏やかに、だが明確に告げる。

『それは、お前自身だ』

レオアリスが言葉を発する前に、その姿は雪に溶けるように消えた。

剣が、カイルの背に届く寸前で止まる。

覗き込んだレオアリスの瞳に、明確な意志の光が戻った。

未だ力を緩めない剣を、握った腕が少しずつ押し戻す。

「レオアリス……」

確認するように呼び掛けたカイルに、レオアリスは瞳だけを向けた。

「……離れてろ」

食い縛った歯から押し出される言葉に、言われるままカイルは数歩後ずさった。

レオアリスの腕が再び上がった。

頭上に掲げられた剣が発する青白い光が、白い世界を染め上げていく。

剣が支配を求めて力を増していく。

無尽蔵にも思えるその力が、自分の中を突風のように激しく吹き上がり、抑え込もうとするほど、全身を切り裂こうとして身の裡で渦を巻く。

身体がばらばらに砕けそうな激痛に、途切れそうになる意識を繋ぎ止める。

だがもう、分かっている。その力も意志も自分の範疇にしかあり得ない。

抑え得るのは、ただ意志と、誇りだ。

自分を常に支える、彼等への。

雪に閉ざされた世界を暖める、しわがれた声。

陽気な声と、置かれた手。

炎の中から見上げた金色の瞳――。

剣から叩きつけられる風が、レオアリスを中心に雪を吹き上げていく。

(――まずい)

ロットバルトは座り込んだままのカイルの身体を抱えると、雪を蹴り後方に跳んだ。

レオアリスの足元で湿った地面が覗き亀裂を生じたかと思えた瞬間、巨大な破片となって竜巻のように空に巻き上がった。

一瞬上空で停止し、竜巻のその中心目がけて急激に落下する。

レオアリスが剣を大地に叩きつけるように突き立てた。

轟音と共に、爆風と光が膨れ上がり、落ちかかった破片を粉々に砕く。

ロットバルトはカイルの身体を抱え込み、地面に伏せた。

光は唐突に消え、辺りに痛い程の静寂が戻る。

身体の上に降り注いだ土砂を払い除け、ロットバルトはふらつく頭を抑えながら立ち上がった。

服の裾を引かれ、踏み出しかけた足を止める。蒼い瞳が呆れとも驚きとも付かないまま見開かれた。

「……凄まじいな……」

ほんの半歩先から、大地は視界の端まで陥没し、すり鉢状の巨大な窪みを作り上げていた。

カイルを助け起こしながら溜息をつく。

「つくづく、良く破壊する方だ」

レオアリスは静かに息を吐き出した。

先程まで渦巻いていた身を引き裂く程の力は、既にレオアリスの裡に収まっている。

地面に突き立てた剣が一つ身震いをし、二本の剣に分かれ、そしてレオアリスの中に溶けた。

晴れ上がった空に顔を上げる。

微かな金属音に、首許に指を当てると、冷えた小さな石が指先に触れた。

村人達はレオアリスの周りに集まり、名残惜しそうに彼等の育て子を見つめた。その顔はどれも皆、恨みがましい色を浮かべている。

「来たのも教えんで、もう帰るとは、薄情もんが」

「カイルもカイルじゃ。わしらに黙って」

祖父が取り囲まれて口籠る様を眺め、レオアリスは可笑しそうに肩を震わせた。そうしながら、こうして再び笑える事に、強い安堵を覚えていた。

その姿に一齐に老人達の厳しい視線が向けられる。

「何を笑つとる、お前もじゃ」

じろ、と睨まれてレオアリスは無理に笑いを押さえ、肩を竦めた。それから改めて彼等一人一人を見回す。

「——もう行くよ。また来る」

「年に一度しか戻らんくせに」

「いつじゃ」

「来る日を教えて行け」

「んな事言ったって……」

四方から詰め寄せられ、言葉に詰まって数歩後退る様を眺め、ロットバルトは苦笑を零した。

「上将。よろしければ、報告は私が先に戻って上げておきますが」

老人達は嬉しそうに頷き合い、レオアリスに再び詰め寄った。

「気が利くのう」

「そうじゃそうじゃ。二三日帰らんでも問題はないわ」

「いつそ帰らんでええ」

「それは困りますね。我々には大将が必要です」

老人達は今度はロットバルトに顔を向ける。

「横暴じゃ！」

「そう仰られても」

ロットバルトは老人達に詰め寄られても素知らぬ顔だ。レオアリスはその様子に笑い、それから僅かに迷う素振りを見せたものの、やはり首を振つ

た。

それは自分の任務として、王から与えられたものだ。

落胆を浮かべ、肩を落とした村人達に再び顔を向ける。

「……またすぐ来るさ。いない間にじいちゃん達がぼっくり逝っちゃっても困るし」

そう言うてにや、と笑ってみせる。

「なんちゆう口の悪いガキじゃ」

「そうそう死なんっ」

「お前みたいな孫がいたんでは、気になって死ねん」

口々に言いながら、それでも老人達は代わる代わる、レオアリスを抱き締める。

最後にカイルがレオアリスに歩み寄り、束の間その顔を見つめ、身体に腕を回した。

祖父の背を見つめたまま、レオアリスは身体を暖める温もりを噛み締める。ずっとこれを感じて育ってきた。

あの手も、これと変わらない温度を持っていた気がする。

「——俺、多分ジンに会った」

咳かれた言葉に、カイルや老人達が瞳を見開いてレオアリスを見つめる。数度躊躇うように開きかけた口が、結局何も紡ぐ事無く閉ざされた。

「単なる、夢かもしれないけどな。……笑ってた」

カイルは一度だけ、静かに瞳を閉じた。

「——そうか」

胸に架けた石は、もはや何も言わない。

ただ深い青い色を湛えてそこにある。

レオアリスは顔を上げた。

「……俺は、この村が好きだよ」

カイルが少し呆れたように笑う。

「止めるのも聞かずに飛び出した奴が、良く言うわ」

「そうだけど。俺を、ここまで育ててくれた」

色々なものをここで培ってきた。彼等なくして、今の自分は有り得ないだろう。

「まだ、礼も言っていないな」

レオアリスは改めて彼等に向かい合おうと、静かに、深く頭を下げた。
「ありがとう」

飛竜の銀の翼が大きく風を孕んで空に浮かび上がる。

一面の白銀の世界が、陽光を受けて眩しいほどに輝く。

ここは、これから雪が降り続け、外界から隔絶された厳しい冬を迎えるのだろう。

レオアリスは暫く白い森の奥に視線を注いでいたが、やがてそれを戻すと、まだ飛竜を見上げたままの村人達に大きく手を振った。

手綱を引き、騎首を南に向ける。

「戻るか」
王都へ。